

イザヤ書13章「バビロンに対する重荷①」

1A 主による軍隊 13

1B 主の日 1-16

1C 諸国の軍隊 1-5

2C 全能者からの破壊 6-16

1D 産みの苦しみ 6-8

2D 世界の悪への罰 9-12

3D 逃げおおせない民 13-16

2B メディア人 17-22

1C バビロンの崩壊 17-18

2C 永久の廃墟 19-22

2A 永久の荒廃 14

1B ヤコブの憩い 1-2

2B 嘲りの歌 3-23

1C 虐げる者の果て 3-8

2C 下界の陰府 9-11

3C 明けの明星 12-15

4C 投げ出される屍 16-23

3B 打たれるアッシリア 24-32

1C 主のご計画 24-27

2C ペリシテの死 28-32

本文

イザヤ書 13 章から読みます。前回、私たちは主が終わりの日に、救いをご自分の残りの民に与えられるところを読みました。イザヤに与えられる神の幻は、エルサレムとユダから北イスラエルへと広がっており、そこでアッシリアの侵略から救い出されることを神は約束されました。その救いは、エッセイの根からの若枝とも呼ばれるキリストご自身です。この方が御霊によってこの地上を歩まれ、この方の裁きによって平和が世界に満ちます。そして散らされていたユダヤ人、神の選びの民を神が集めてくださいます。そしてイザヤと残りの民は、神こそが私たちの救いであると賛美するのです。

そして 13 章から 20 章まで、イスラエルを越えて周辺の諸国にまで及びます。バビロン、ペリシテ、モアブ、ダマスコ、クシュ、そしてエジプトに対する宣告へと移ります。「宣告」と訳されているのは、直訳は「重荷」です。そして、その間に、何回か、この預言を聞いているユダヤ人に差し迫るア

ツシリアの脅威へと近未来へ預言が戻ります。

これらに対する預言は、神の裁きです。主は確かにイスラエルを選ばれ、イスラエルが神に聞き従わないので裁かれますが、周囲の国々もイスラエルとの関係において、神の啓示を受けています。それでも応答しない彼らに対して裁かれるのです。同じように、今のすべての人々は、キリスト者と教会の証しを聞くことによって、神の裁きから免れることはないことを知る必要があります。

1A 主による軍隊 13

そして周囲に対する裁きは、バビロンから始まります。ここでイザヤが預言しているのが、アハズの治世であったことを思い出してください。紀元前 730 年辺りです。その時にバビロンは、確かにアッシリアの抵抗勢力として台頭していましたが、大きな国ではありませんでした。バビロンが台頭するのはずっと後、紀元前 605 年以降です。

それではなぜ、ここでイザヤがバビロンを他の周辺国に先じて預言しているのかと言いますと、11-12 章の続きだからです。11 章から 12 章にかけて、主は、アッシリアを滅ぼされることを約束しながら、残りの民にとっての救いの完成、つまりキリストの到来を約束したからです。この方が現れて、神の国が地上に立てられて、それで神の怒りが去るということを神は約束されました。アッシリアが倒れるのは近未来に起こりますが、神は、終わりの日にはバビロンを倒されます。

バビロンは、ネブカドネツアルが紀元前 605 年に治世を始め、そしてユダの国からその民を捕え移す国です。605 年初頭に行い、597 年にも第二回目を行ない、586 年の三回目で、エルサレムの神殿を破壊して、ユダの民は完全に捕え移されました。しかし 539 年に、ベルシャツアルが王であった時にメディア・ペルシア連合軍がバビロンの町に突入し、それで滅んだ国です。

しかし、この歴史的出来事以上に、バビロンは実は人間の歴史の初めから終わりまで、神に反抗する都として登場します。歴史では、新バビロニア帝国とも呼ばれるバビロンだけでなく、神のご計画に反抗する町として、創世の始まりから、世の終わりまで存在するバビロンがあります。ノアの時代の洪水の後、人々が世界に満ちなければいけないところ、人々はシンアルの地に留まり、そこに煉瓦で家を建て、アスファルトで壁を塗り、そして町々を建てました。彼らは神に反抗して、自分たちで安全を確保しようとしたのです。それだけではありません。「創世 11:4 さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」天におられる神を認めず、自分たちが天に届き、自分たちが名をあげる、つまり神のようになろうとしたのです。地に満ちよと命じられた神に反抗して、散らされてはいけないと言いました。これがバベルの塔と呼ばれます。これがバビロンの発祥であり、神に頼らず、自分たちで安全を確保し、そして神をあがめず自分たちの努力で神に取って替わろうとしました。そして天体を拝む、つまり偽りの宗教を始めることをしました。

これが、霊的なバビロンであり、聖書では「世」と呼ばれているものです。「Iヨハ2:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」「5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」サタンの支配下にあり、神に反抗する世界です。

これが世の始まりに起こったことですが、世の終わりにバビロンが再び顕在します。バベルの塔は聖書の初め創世記 11 章に書かれていますが、終わりの日のバビロンは聖書の終わり、黙示録 17-18 章に書かれています。「また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「黙示 17:1-5 また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と淫らなことを行い、地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました。」それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒す名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。その額には、意味の秘められた名、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」という名が記されていた。」神とイスラエル、また神と教会の関係は婚姻関係に喩えられています。ここでは、神との関係において最も不貞な関係、地上の王たちと淫行を犯し、世の富を集めている大淫婦に喩えられています。そしてこの大きな都バビロンが、神によって裁かれることが預言されています。そしてキリストの再臨が来ます。

かつてユダの民を虐げたバビロンが歴史上でありました。それだけでなく、世の始まりから終わりまで、神に反抗して、神の民を虐げ、迫害する、この世の霊が働いています。世に対する裁きが、これから読む、13 章と 14 章のバビロンに対する裁きに示されていることです。歴史上のバビロンに対する裁きも預言されており、また世の終わりに滅ぼされる、大淫婦バビロンの滅びも預言されます。「Iヨハ 2:17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」そして、この世と世の欲が滅び去ること、これがイザヤ書 13 章と 14 章に貫かれている原則です。この内容の豊富な預言になるため、今晚はパート I として 13 章のみ学びましょう。

1B 主の日 1-16

1C 諸国の軍隊 1-5

¹バビロンについての宣告。これはアモツの子イザヤが見たものである。

この「宣告」というのは、直訳は「重荷」です。神のことばが重いということで、聞く人々に押しかかる重荷としての言葉です。

²「はげ山の上に旗を掲げ、彼らに向かって声をあげ、手を振って、彼らを貴族の門に入らせよ。」³

わたしは、わたしに聖別された者たちに命じ、また、わが怒りを晴らす勇士たち、わが威光に歓喜する者たちを呼び集めた。」⁴ おびたしい民にも似た、山々のとどろく音、集まって来る国々、王国のどよめく音がする。万軍の主が軍隊を召集しておられるのだ。⁵ 彼らは遠い地から、天の果てからやって来る。全世界を滅ぼすための、主とその憤りの器だ。

エルサレムの都を破壊し、ユダヤ人を捕え移したバビロンは、紀元前 539 年に滅びました。バビロンの最後の王ベルシャツアルが大宴会を催している時のことです。ダニエル書 5 章に書かれています。その時、ペルシアの王キュロスが、メディア・ペルシアの連合軍を率いていました。そして、バビロンの町に侵入します。「貴族の門に入らせよ」と書いているのは、そのためです。「ダニ 5:1-4 ベルシャツアル王は、千人の貴族たちのために大宴会を催し、その千人の前でぶどう酒を飲んでいました。ベルシャツアルは、酒の勢いに任せて、父ネブカドネツアルがエルサレムの宮から持ち出した金や銀の器を持って来るように命じた。王とその貴族たち、および王の側室たちや侍女たちがその器で飲むためであった。そこで、エルサレムの神の宮の本殿から持ち出した金の器が運ばれて来たので、王とその貴族たち、および王の側室たちや侍女たちはその器で飲んだ。彼らはぶどう酒を飲み、金、銀、青銅、鉄、木、石の神々を賛美した。」

彼らが宴会で酒に酔い、へでれけになっていました。その時に、かつてネブカドネツアルがエルサレムの神殿から持ってきた器で、酒を飲みました。しかも、自分たちの神々をそれで賛美したのです。公然と、エルサレムの神を冒瀆しています。その時に、人の指が壁に何か書いたのを見ます。その文字をダニエルが解き明かしました。それは、ベルシャツアルの治世は終わり、メディア・ペルシアに引き渡される意味でした。そして、ダニエル 5 章の終わりにはこう書いてあります。「5:30 その夜、カルデア人の王ベルシャツアルは殺された。」

宮殿の中に、メディア人が入ってきます。主は、その軍隊を「わたしに聖別された者たち」と呼ばれています。前回の学びにおいて、アッシリアが北イスラエルを滅ぼす時に、主がイスラエルに対する怒りの器として用いられたことが書かれていました。同じように彼らが、バビロンを滅ぼすための器として、神が積極的に用いられているということです。

しかし、この預言はそれだけではありません。「彼らは遠い地から、天の果てからやって来る」と言っています。バビロンにとってメディアとペルシアは遠い国ではありません。「全世界を滅ぼすための、主とその憤りの器だ。」と言っているところで、さらに明らかです。これは、黙示録 17 章にある大淫婦のことです。黙示録 17 章には、淫婦が獣に乗っています。その獣は、世の終わりに登場する反キリストです。獣の国の中で、宗教的な存在として世界の王たちと蜜月関係を持っている存在でした。しかし、政治的指導者である獣にとって、途中でお荷物となります。消し去りたい存在となります。そこで、獣は彼女を荒廃させるようにさせる、とあります。

「17:16-17 あなたが見た十本の角と獣は、やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすこととなります。それは、神のことばが成る時まで、神はみこころが実現するように王たちの心を動かし、彼らが一つ思いとなって、自分たちの支配権を獣に委ねるようにされたからです。」反キリストがまとめる世界の諸国の軍隊が、この大きな都を滅ぼしてしまうということです。その後、自らを神とする獣の国を立てます。

2C 全能者からの破壊 6-16

1D 産みの苦しみ 6-8

⁶ 泣き叫べ。主の日は近い。それは全能者からの破壊としてやって来る。⁷ それゆえ、すべての者は氣力を失い、すべての人の心は萎える。⁸ 彼らはおじ惑い、子を産む女が身もだえするように、苦しみと激しい痛みが彼らを襲う。彼らは炎のような顔で互いに驚く。

「主の日」の宣言です。これは、ここにあるように神の定めておられる、全能者からの破壊の日です。旧約時代の預言者は、何度も何度も、この日について預言しました。そして新約聖書でも、何度となく語られています。イエスご自身が、オリーブ山で、弟子たちに教えられました。「ルカ 21:25-27 それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり氣を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」この日が来ることを思って、主を畏れかしこんで生きなければいけません。使徒ペテロが言いました。「2ペテロ 3:11,14 このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならぬことでしょう。・・ですから、愛する者たち。これらのことを待ち望んでいるのなら、しみも傷もない者として平安のうちに神に見出していただけるように努力しなさい。」

ここには、「子を産む女が身もだえするように」とあります。どうしようもない、助けようもない、逃れることのできない苦しみです。使徒パウロがテサロニケの人たちに書きました。「1テサロニケ 5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」紀元前 539 年、ベルシャツアル王は楽しんで、歌っている時に突如として襲撃に遭い、彼は殺されました。彼は、人の指が壁に何かを書いている時に、「腰の関節はゆるみ、膝はがたがた震えた。(ダニエル 5:6)」とあります。同じようにして、主の日は突如として襲いかかります。そして、人々は震えもだえます。平和である、安全であるという安逸、このような慢心が最も靈的に危険であるということが出来ます。

2D 世界の悪への罰 9-12

⁹「見よ、主の日は来る。憤りと燃える怒りの、残酷な日が。地は荒廢に帰し、主は罪人どもをそこ

から根絶やしにする。¹⁰ 天の星、天のオリオン座は その光を放たず、太陽は日の出から暗く、月もその光を放たない。¹¹ わたしは、世界をその悪のゆえに罰し、悪しき者をその咎のゆえに罰する。不遜な者の誇りをくじき、横暴な者の高ぶりを低くする。

なぜ主は、このような恐ろしい日、残酷な日を与えられるのか？それは、悪のために世を罰するためです。主はご自分の怒りを現し、地を荒廃させたことが何度か、歴史の中で行われました。例えば、ノアの時代の洪水です。人々が悪にしか傾いていないのを見て、生きているものを全て水で消し去られました。ソドムとゴモラもそうです。彼らの悪が主にまで届きました。それで、火と硫黄によって滅ぼされました。主は忍耐深い方であり、怒るに遅い方です。けれども、悪を野ざらしにする方でもないのです。神は、その忍耐強さの中で、それでも悔い改めない者たちに対して、正しい裁きを下されます。「神の怒り」というのは、聖書全体に啓示されている大きなテーマです。決して私たちがはしないがしろにしてはいけない内容です。

そして神の福音は、神の御怒りがくだる、曲がった世から私たちを救い出してください。私たちが罪を悔い改め神に立ち返る時に、神はキリストの血によって私たちの罪を豊かに赦して、聖霊の賜物を与えてくださいます。ペテロは悔い改めた人々に対して、「使 2:40 この曲がった時代から救われなさい」と言って、彼らに勧めた。」と励ましました。パウロは言いました。「ガラテヤ 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。」ロトが、ソドムの町から出ることによってその裁きから救われましたね。同じように、主は私たちを地上から引き上げ、この世から引き出すことによって、大患難から救い出してください。遅すぎる前に、悔い改め、主から罪の赦しをいただくのです。

¹² わたしは人を純金よりも、人間をオフィルの金よりも尊くする。

大患難の中で、人々の数は極限します。黙示録を見れば、大患難は、6章の七つの封印をイエス様が解かれるところから始まります。戦争が起こり、極度のインフレで人々が食べられなくなり、死病と獣によって殺されます。そして、大地震が起こり、天地が揺り動かされます。信仰者は殉教します。七つのラッパでは、木々の三分の一が焼かれ、海の三分の一が血になり、川の三分の一が汚されます。太陽と星の光が三分の一になります。9章では、五カ月の間、さそりのような毒でもだえ苦しんだ後に、二億の悪霊の大群で、「人間の三分の一が殺された」とあります(9:18)。その後、さらに激しい災いがあり、本当に人が少なくなっていくます。

3D 逃げおおせない民 13-16

¹³ それゆえ、わたしは天を震わせる。大地はその基から揺れ動く。万軍の主の憤りによって、その燃える怒りの日に。

主は、大きな患難を地上に下され、その最後が、このような天変地異、大異変を与えられます。「マタ 24:29 そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。」人々の苦難の中で、最も安定した基になっているこの地面、それから、自分たちの天井のようにになっている天がゆり動かされるほど、恐ろしいことはありません。だからこそ、私たちは神のことばをしっかりと握りしめるのです。こう言われました。「24:35 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」

¹⁴ 追い立てられた、かもしかのように、集める者のいない羊の群れのように、彼らはそれぞれ自分の民の方に向かい、それぞれ自分の地へ逃げ去る。¹⁵ 見つけられた者は、みな刺し殺され、連れて行かれた者は、みな剣に倒れる。¹⁶ 彼らの幼子たちは目の前で八つ裂きにされ、家は略奪され、妻は犯される。

バビロン帝国には、服従した数多くの国民がいました。それで、その都が滅びる時にそれぞれの国に逃げ去ろうとしますが、敵に見つけられた者たちは無残に殺され、略奪され、そして凌辱されます。将来の、終わりの日のバビロンも、その莫大な富によって王たちと手を結んでいるので、数多くの国々の民が関わっています。しかし、その破滅から免れることはできないのです。そしてこれは、神なしで安心していた者たちの行き着く先になります。主から離れているのですから、休まる場所はないのです。逃げようとしても災いは追いつきます。

2B メディア人 17-22

1C バビロンの崩壊 17-18

¹⁷ 見よ、わたしは彼らに対して メディア人を奮い立たせる。彼らは銀をものともせず、金さえ喜ばず、¹⁸ その弓は若者たちを撃ち倒す。彼らは胎の実さえあわれみせず、子どもたちにさえあわれみをかけない。

バビロンを滅ぼすのはメディア・ペルシア連合軍ですが、メディア人がバビロン人にどのようなことをするのかを教えてください。バビロンの富によって、その金銀によって彼らの怒りを宥めることはできませんでした。そしてここに書いてあるように、かなり残虐なことを行いました。金銭で自分の安全を確保していると思っている者は、後でひどい目に遭うということです。

2C 永久の廃墟 19-22

¹⁹ こうして、諸王国の誉れ、カルデア人の輝かしい誇りであるバビロンは、神がソドム、ゴモラを滅ぼしたときのようになる。²⁰ そこには永久に住む者もなく、代々にわたり、住みつく者もない。アラビア人もそこには天幕を張らず、牧者たちもそこに群れを伏させない。²¹ そこには荒野の獣が伏し、彼らの家々には、みみずくがあふれる。そこには、だちょうも住み、雄やぎがそこで飛び跳ねる。²² 山犬はその岩で、ジャッカルは豪華な宮殿でほえ交わす。その時が来るのは近く、その日は

もう延ばされることはない。」

バビロンは滅ぼされたら、火と硫黄によって滅ぼされたソドムとゴモラのようにになります。つまり、人の住まないところとなります。しかもその無人地帯は永久に続くがあります。その様子は、まるで放射能汚染を受けた町のようなのです。野生の動物のみが棲息することになります。そして、遊牧をするアラビア人でさえ、そこを歩かないようになります。黙示録には、「18:2 倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。」とあります。興味深いことに、今のバビロンの遺跡の所に遊牧民は確かに寄り付かないそうです、悪霊がいるから、ということらしいです。

確かに今も、バビロンにおいてその廃墟を見ます。遺跡の復元作業が行われていますが、基本的に廃墟です。ペルシャツアル王が倒れて、バビロンの都が滅びましたが、何世紀もかけて起こったことでした。ペルシアの王キュロスは、この都をそのまま使いましたし、ギリシアの王アレクサンドロスも使いました。廃墟となるのはその何百年も後です。

しかし、ここで描かれているバビロンは、突如の破滅によってこのようになります。これは終わりの日に、終わりの日のバビロンに起こることです。永久の虚空であります。主による滅びは、永遠に定められた滅びです。このようにして世は滅びます。私たちは、ここに希望と慰めがあります。世においては、患難があるからです。信仰を持つことによって、葛藤が生まれます。戦いが生まれます。しかし、その反対勢力、霊の勢力はいずれ、永遠の滅びに至るのです。一時、滅んでも復活するようなものではありません。

次回、14章は、虐げられたイスラエルの民が慰めを受けるところから始まります。